

主権者教育を推進する群馬県大学コンソーシアムに所属する学生チームが作成したインタビュー記事を紹介しします。今回は第2回、B・Eチームの記事紹介です！

Bチーム

主に高崎経済大学の学生でチームが組まれています。グループのテーマは「過疎」に関する事で、県職員インタビューは群馬県庁の「地域創生課」に、議員インタビューは亀山県議に行いました。

Eチーム

県立女子大学、桐生大学、群馬大学などの学生でグループが構成されています。グループテーマは「教育のDX」に関する事で、県職員インタビューは群馬県の「教育委員会」に、議員インタビューはBチームと合同で、同じく亀山県議に行いました。



◎第2回は、B・Eチームそれぞれの県職員インタビュー記事、そして合同で行った県議会議員インタビューの記事を添付しますので、是非ご覧ください！

県内市町村の選挙情報

選挙の種類	告示日	投票日	関連QRコード
太田市長選挙	4月6日（日）	4月13日（日）	

群馬県の過疎対策について

Bグループ

「インタビュー先」地域創生課

「職員の方」地域支援・過疎係

金井係長、中津瀬主任、大沼主事

「担当」高崎経済大学 小野 祐未

高崎経済大学 伊藤 新

高崎経済大学 平山 蒼士

高崎経済大学 菊地 颯



「地域創生課の概要」

地域創生課はスポーツ振興課、文化財保護課、群馬暮らし・外国人活躍推進課、文化振興課等と同じ地域創生部に所属している。地域づくり団体や過疎地域の支援、土地や水の適正な利活用の推進など、様々な取り組みを通じて「持続可能な地域づくり」を目指している。

Q 地域創生課の所属紹介動画の中で「地域の活動や住民の思いを各地の「仲間」と共有する」という一節がありましたが、具体的にどのような事を行っているのでしょうか。

動画内と言う「仲間」とは、一つには地域団体を指します。地域に根差した活動を行う団体同士を表彰や交流によって繋げ、地域振興の輪を広げています。県、市町村、地域団体がフラットな協力体制のもと交流を深めています。

Q 主な事務内容の一つに“地域と東洋大との連携”とありますが、具体的にどのような取り組みをしているのか教えてください。

群馬県内には東洋大学の板倉キャンパスが所在していたため、平成9年から、産学官連携で様々な研究や商品開発、健康増進に関する事業などを展開していました。ただ現在は、板倉キャンパスの移転に伴い、跡地の有効活用について、大学や板倉町と連携して検討を進めています。地域と大学の連携でいえば、現在群馬大学が自動運転事業について自治体と共同研究を進

めている例などもあり、今後も連携は広まっていく可能性はあると考えます。

Q 主な事務内容の一つとしてあげている“山村と都市との連携・交流支援”について、その内容を教えてください。

山村と都市との連携・交流支援に関しては様々な取組がありますが、一つの例として、過疎地域の魅力を都市に伝えるためのオンラインイベントが挙げられます。コロナ禍には、群馬県が持つ快疎な魅力をPRするために、都市部の方の手にキャンブ道具と食材を送り、オンラインで一緒にキャンブを体感いただくなどコロナ後にも来てもらえるような取組みを行っていました。

Q 県が公表している、群馬県過疎地域持続的発展方針では「自然とともに快適に暮らし、都市にはない価値を生み出す、先進的な快疎社会の実現」を将来像として掲げていますが、群馬県の過疎地域における価値とは何だと認識していますか。

都市部と比べた場合には、“快疎”自体が価値といえます。また、群馬県として見れば、独自の文化や民俗、温泉などが挙げられます。この点を考える上で難しいのは「価値」というものは決まった基準があるわけではなく、人それぞれによって異なるという点です。そういった「価値」になりえる要素をどう見出ししていくか、

どう伝えていくかが大事だと考えています。

Q 特定地域づくり事業協同組合制度について教えてください。

特定地域づくり事業協同組合制度とは、事業協同組合と事業所間の人材のやり取りを支援すること、人口急減地域における地域の担い手の拡大を目指す制度です。地域の実情に応じて活用してもらう制度であり、群馬県においては現在までで2組が認定されています。

Q 特定地域づくり事業協同組合制度における地域づくり人材の確保について、群馬県ではどのような人材をメインターゲットとしていますか。

どのような人材を必要とするかはそれぞれの地域によって異なります。各地域の「組合」が必要人材を判断し募集しています。組合が移住者等を雇用し、安定的な雇用環境を提供することで、将来的に地域に定着してもらうことが一つの目標になるので、そうした点を重視して選定していると考えられます。

Q 移住者を過疎地域に定着させるための取組等がありますか？

地域おこし協力隊という制度があり、この制度は都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を移し、その地域の課題を解決していくという事業であるため、将来的には定住に繋がる可能性も持っています。任期終了後、定住し

た隊員の割合は65.0%に上ります。県としては、地域おこし協力隊として活動している人を定住に繋げるために、県内での起業や就職に関しての研修会を開くなどの取組も行っています。

Q 公務員の仕事で、勤める前の想像と実態の乖離はありましたか。

実際に就職する前は、公務員という職種に堅いイメージはありましたが、この部署では地域おこし協力隊の支援事業を始め地域の方とのアクティブな交流が多く、その点は想像と違った点といえます。また、個人単位で仕事の担当がきっちり分担されているため、自分の担当に責任を持って日々業務にあたっています。

Q 仕事で多くの人々と関わっていく中で、各方面と良好な関係を保つために必要だと思うことを教えてください。

自ら現場に足を運び、相手に自分のことを知ってもらい、信頼してもらえようにすることが大切だと思います。また、仕事を楽しむこと、様々なことに興味をもつことも必要だと思います。

Q 業務の中で、変わったクレームなどを受けたことがあれば教えてください。

クレームではありませんが、日頃から自衛隊や米軍機の騒音トラブル等の問い合わせ窓口を担当しています。

また、県内のダムにYouTuberが来て、心霊

スポットとして動画を上げていることに対して「風評被害が心配」との相談連絡を受けたこともあります。

【編集後記】インタビューを終えて

貴重な機会を頂き本当にありがとうございました。これを機に、自分の住む自治体がどうなっていくべきか学んでいこうと思います！（小野）

群馬県の過疎地域は他地域と何が違うのかと思っていたが、人々の暮らしがある中で、良さを見出していくことの重要性を認識させられた。

（菊地）

インタビューを通じて地域創生への知見を深めることができ、貴重な体験になりました。本当にありがとうございました。（伊藤）

今回で地域創生に携わる方々について深く学ぶことができました。この機会を得た知見を元に見識を広げて行きたいです。（平山）

（インタビューした日…令和六年八月二十一日）

教育のDX化について

Eグループ

「インタビュー先」 教育委員会総務課

学びのイノベーション戦略室

「職員の方」 デジタル教育推進課係

長谷部係長・坂本指導主事

「担当」 群馬県立女子大学 茂木春香

桐生大学 皆川茉莉江

群馬大学 松村菜々美

群馬大学 渡邊悠真



Q DX化という新しい取り組みに伴い、現場ではどのような課題がありましたか。

例えば、欠席や遅刻連絡のデジタル化も進んでいます。電話連絡の方が望ましいという学校もあるため、実態によってDX化の対処方法が異なるという課題があります。各学校の状況や希望を、直接学校を訪問して支援する教育DX推進アシスタントがしっかりと把握する仕組みになっています。

Q 教育イノベーション推進体制を構築するにあたり、どのような分野の企業と連携していますか。

基本的には、DX化を進めるためのネットワークの導入や開発に関する企業が多いと思います。あとは教育データの活用や分析を行っている、コンサルティング会社が多いです。今話題になっている生成AIやそれに関わるような企業も多くなっており、今後の状況や時代、ニーズによって様々な企業と連携していくような状況です。

Q デジタルデバイスに関する問題を解消するために、県としてはどのような取組を行っているのでしょうか。

現在、県立高校の1学年では、生徒が自分の端末を持参する形になっており、県教育委員会は、安心して端末を購入できるよう、値段が安価で補償内容も充実した端末を提供する事業者と協

定を結び、その推奨端末の購入を促しています。

また、端末の購入が難しい保護者には、購入支援金の給付や、卒業生が使用していたChronobookを貸し出すなどの支援も行われています。さらに、県教育委員会総務課が主導する「ICT教育推進研究協議会」があり、群馬県内の全35市町村教育委員会や、県教育委員会の総務課や義務教育課、高校教育課などの関係課が参加し、今後のDXやICT活用を取り入れた学び方について検討しています。この協議会の中で、市町村によってICTツールの使用に差が出ない、地域差が出ないための検討も行っています。

Q 国の交付金によって新たなデジタル教材を作成するという事業の仕様書の案に、美術教材の例があったのですが、特に美術教材を挙げたのはなぜでしょうか。

美術の教員は各学校で数が少なく、小学校の教員に関しては美術が専門でなくても授業を担当することになります。そのため、他の教科と比べると授業の質に差が付きやすいという課題があり、その課題を解決するための案として挙げられたものでした。また、教員が主観に基づいて指導をすると、子どもは自身が考え思い描いた作品を作ることができず、制作過程よりも作品そのものを重視してしまうという懸念もあったため、この案を挙げました。

Q 群馬県庁で働く中で感じられる特色や強みは何ですか。

何か事業を進めていく際に、正しさを検証してから実行するのではなく、実行しながら考え修正を加えていくといったやり方であることが、特徴だと感じます。今は、かなり速いスピードで教育のDX化に関わる取組が進んでいて、山本知事らしいやり方で、時代の流れに沿っていると思います。

Q 技術科の教員を目指したきっかけは何ですか。

憧れの先生がいたからです。自分が子どもの頃、授業を受けつつもこんな授業をしたいなと思ったこともあります。あとはものづくりが好きだったからというのもあるかもしれないですね。

Q デジタル人材を育成することによって、地域社会や地域経済、労働市場にどのような変化や発展を期待していますか。

少子高齢化が進む中、限られた人的資源でより高品質なサービスを提供するためには、デジタル技術の活用が不可欠です。芸術や教育、公務員などの分野においても、デジタル技術は大きな役割を果たすでしょう。例えば、生成AIやプログラミングで動くロボットなど、デジタル技術を活用することが求められます。重要なのは、単にデジタル人材を育成することが目的ではなく、デジタル技術を使って何ができるかを個々が考え、身に

つけていくことです。これが、地域社会や地域経済、労働市場の発展に寄与し、皆さんがその発展に関わる重要な要素となるのです。

Q 大学での学びは、現在のお仕事にどのような良い影響がありましたか。また実際に働いてみてどのような苦労がありましたか。

教え方や教科の内容に関する学びは、教員として働く際にそのまま活きました。ただ、実際の現場で様々な子どもと関わる方法は経験のなかで学んでいくしかありませんでした。行政の仕事に就いてからは、学んでいない仕事の担当がほとんどのため、学びながら仕事をこなしていききました。いろいろな人と出会えて、刺激的でありがたい経験をするのができた一方で、悩みやストレスも多くありました。なんで自分が、と思うこともあります。なるべく楽しみながら仕事をするようにしています。

【編集後記】インタビューを終えて

自分が生徒だった頃よりも、学校におけるDX化は細部に及んでいて、急速に進んでいるのだと実感しました。お二人のお話にもあったように、学校ごとの実情や教員の意見を考慮し、それぞれに合ったDX化を進めていくことが重要だと感じたので、現場の声をしっかりと拾いながら県に集約していくための仕組みが作られている点が良いと感じました。デジタルの導入が効率化の助

けになるような、理想的な進歩が群馬県で進んでほしいと思います。(茂木)

今回お二人の話を聞いて、教育のDX化が進むことで子供たちがより学業を行いやすい状況になってきているように感じました。オンライン授業に関して、もしかしたら一部地域では普及が進んでいないかという懸念があったのですが、既に素早い対応がされており安心することができました。これからも、学校に通いたい子も事情があつて来られない子も平等に学びの機会が得られるような環境があつてほしいと思います。また、行政と企業で対話を行い新しい考えが生まれることで双方にとってプラスになるような関係はとても理想的だと感じました。

(皆川)

生徒一人一台の端末が標準となりつつある中で、経済的に端末の購入が困難な家庭への支援が手厚く行われており、家庭間の経済格差が学習機会に影響を及ぼさないよう、県が積極的にサポートを提供していることで、教育の公平性を確保していることを感じました。また、生徒と保護者のデジタルデバイスとを解消するために、多様な関係者が集まり、DXやICT活用を取り入れた学習方法について議論を重ねている点も印象的で、生徒や保護者がデジタル教育環境に適応しやす

くなるよう、十分な配慮がなされていることを知ることができました。（松村）

実施されている施策は現場の問題を解決するために策定され、それにかかる現職の先生との情報交換や定期的な学校訪問を行っているというお話が印象に残りました。美術教育における表現力・想像力の伸長に関しても、美術教育の現状を踏まえた解決策の提示となっていました。教育の実情をこれまでとは異なる視点から見るとともに、行政の教育に対する向き合い方の印象をあらためることができました。（渡邊）

（インタビューした日…令和六年八月二十日）

「インタビューした議員」

亀山貴史 県議

【担当】 高崎経済大学 平山 蒼士

高崎経済大学 伊藤 新

桐生大学 皆川 茉莉江



Q 亀山議員にとつての群馬県の価値はどういった点が考えられますか。

都会と比べた時に、密集していない空間的な広さがあるというところによさがあると感じます。また、山や川などの自然が近くにあるというところも魅力の一つとして挙げられると思います。自然が身近なことにより四季を強く感じることができると、その美しさが群馬県という「快疎」にあたると思います。

Q 群馬の魅力を定住に繋げるのか、観光地として進めていくのどちらが良いとお考えですか。

人口減少の面からは、群馬からでも東京へ通勤できますし、リモートワークも進んでいるので、住んでもらうというのが一番良いとは思いますが。一方、日帰り圏内で遊びに行けるということも強みではあります。どちらにせよ、群馬に来てもらって関係人口になって、群馬を一つの選択肢として考えてもらうことが大事かと思っています。その中で必要な整備をしていければ良いかと思っています。

Q 企業を誘致するという動きは県議会の中で出ていますか。

県議会でも、群馬県庁の産業経済部でも出ており、産業団地などの整備の動きもあります。その反面、地元の企業も大切です。企業誘致によつて雇用の形が崩れることへの対策は必要だと思っています。企業誘致も地元企業の応援もバランスが大事だと思いますし、それこそが我々政治の担う役割だと思います。

Q 過疎化を逆手に取り、広大な自然の下で子どもたちへの教育及び食育を推進させる土地利用は可能だと思いますか。

群馬では広いスペースで実体験ができることが強みだと思います。自然環境の下で研究活動ができたり、正規の大きさのグラウンドでスポーツの練習ができたりという点は群馬の強みとして生かしていきたいと考えています。また、大切な資源として環境を守ることも議員の仕事

としてやっていきたいと思っています。

Q 議員になる前の職業と、その経験が今の活動に生かされたという点がありましたら教えてください。

トヨタの子会社で働いていました。システム関係のプロジェクトに所属していた時の話ですが、全国様々な地方から集められた社員と共にプロジェクトを進めていく際、色々な意見がある中でそれをまとめていった経験は、今にも活かしていると思います。

Q 亀山議員が思う住みやすい地域とはどんな地域ですか？

生活に必要な物が揃っている快疎な地域だと思います。また、交通網が整備されていることも重要で、外部へのアクセスだけでなく、病院や商店といった、内部の施設へのアクセスも大事です。また、地域内経済が循環しているという点もあると思います。

Q 議員として今後の過疎化に対する対応策のビジョンを教えてください。

若い世代の人口流出や人口減少が過疎化につながってしまうため、群馬で子どもを産んで、群馬で育ててもらうことが大切だと考えています。子育て世代に焦点を当てた政策と進めていき、群馬で子どもを学校に通わせようと思ってもらえるように群馬の環境についてアピールしていきたいと思っています。また、自然やエネ

ルギー効率に関する政策を群馬で推進し、企業の拠点を群馬にしてもらうことも必要だと思っています。

Q 亀山議員は、現在資格など持っていますか。

防災士を持っています。県内の議員の中でもこの資格を取ろうという動きが出てきています。昨今災害が多いですが、防災士の知識があれば、ただ避難するだけでなく、避難所の運営に携わることが出来ます。他には、前職の関係で、損害保険や生命保険に関する資格は持っています。

Q 亀山議員が政策に掲げている「双方向の受発信」を、より幅広い県民に向けて行うにはどのような政策があるとお考えですか。

政策がトップダウンではなく、ボトムアップであることが必要だという思いから、この政策を掲げています。一部の人だけで政治を進めているという印象があると、誰がやっても変わらないというような政治不信に繋がると思うからです。この取組をより広げる方法については、試行錯誤はしているところですが、SNSで意見を集約するなどができればと思っています。

Q 地方議員を経験して、国政に進出したりなどのお考えはありますか。

野心はあまりありません。どのポジションであれば自分のやりたいことを実現できるのかだと思っていますが、今私がやりたいことを一番実現できるのは県議会議員であり、今のところ国会議

員になりたいとは考えていません

Q 県議会議員の実際の働き方について教えてください。

人に会いに行つて話を聞きに行くことが多いので、デスクワークの時間は相対的には少ないです。デスクワーク的な仕事を任せるために秘書がいるのかもしれませんが。

Q 今般の選挙や政治活動においてSNSを通じた情報発信が盛んになっていますが、今後どのような手段でこういった人にご自身の政策や活動について伝えていきたいとお考えですか。

地方議員や県議会議員はおよそ千人規模の方々と実際に会って意見交換をしているため、直接会って意見交換する場がアナログではあっても大切にしていかなければならないと思っています。また、第三者に応援してもらい、人の輪を広げるためにはSNSやホームページの活用も重要です。仲間内で意見交換をしているだけで終わらせるのではなく、議員としてそれを形にできるような働きかけていきたいと思っています。

Q 議員をやっている一番やりがいを感じたことは

一つに絞り込むのは難しいですが、事故の多い交差点の信号機に右折専用信号を取り付けるよう県警に要請したことは、形にも残りました

し、印象に残っています。

【編集後記】インタビューを終えて

群馬を盛り上げるための今後の展望など、調べてもわかりづらいようなことを議員の方から直接聞ける機会と言うものが設けられていることに感謝したと思います。(平山)

今回インタビューに参加し、実際にお話を聞かせていただけたことによって、より過疎化問題への関心が高まりました。お忙しい中、ありがとうございました。(皆川)

インタビューを通じ、過疎化問題をはじめとした様々なお話を聞くことができ、大変勉強になりました。貴重な体験をありがとうございました。(伊藤)

(インタビューした日…令和六年十二月四日)